様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２１１０３

研究課題名（和文）日本中世漢学史の包括的把握への基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on a Comprehensive Understanding of the History of Medieval Chinese Studies in Japan.

研究代表者
高田　宗平（TAKADA, Sohei）

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・客員研究員

研究者番号：８０５９７１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本中世漢学の研究は、従来、清原氏に代表される博士家の学問や禅僧の文学活動である五山文学の解明が中心であった。研究状況に鑑み、本研究計画では、清原家以外の公家・官人層と顕密僧のそれぞれにおける漢学実態に着目し、改元・年号関連資料の検討を通じ、①藤原氏南家などの『修文殿御覧』受容実態を明らかにし、②年号勘文の読申について、寛元度に、年号字と出典は呉音にて読むことが規定されていたこと、嘉禎度に、菅原氏では出典は呉音で読み、本文は漢音で読むことが記されていたことの点を指摘した。③台湾故宮博物院所蔵の楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』の詳細な書誌解題を提示し、書誌学的な全容を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
先行研究では、清原氏の家学と五山文学が日本中世漢学の代表であるかのように見なされてきた嫌いがある。それは多くの先行研究の力点が清原氏家学の明経道と五山文学の実態を解明することに置かれてきたことに起因する。従って各階層内の包括的俯瞰は未だなされておらず、中世漢学の全体像は未だ明らかではない。本研究の成果を活用することにより、中世漢学が包括的に把握され、より立体的・複眼的な「日本中世漢学史」が構築される一歩を踏み出したと思われ、中世漢学を日本の学術文化として日本歴史の中に位置付けを行う環境の一端が見えてきたと思われる。また本研究の成果は、中国で注目される域外漢籍研究にも貢献できる内容である。

研究成果の概要（英文）：Until now, the study of medieval Chinese studies in Japan has centered on the study of the doctoral family represented by the Kiyohara clan and the elucidation of the Gozan literature, the literary activities of Zen monks. In this project, we focused on the actual state of Chinese studies in the aristocracy, bureaucracy, and exalted monks other than the Kiyohara family, and clarified the following points.
The following points were elucidated through a review of materials related to the revision and year.
Elucidated the reception of the Shubundengyoran by the Fujiwara clan's Nanke (southern family).
The author presented a detailed bibliographic analysis of Palace Museum of Taiwan (Yang Shoujing Collection) in the LunyuYishu, and clarified its entire bibliographic scope.

研究分野：日本古代中世漢籍受容史・漢学史

キーワード：類書　藤原氏南家　壬生坊城家　藤原北家日野流　『修文殿御覧』　台湾故宮博物院　楊守敬　『論語義疏』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

日本中世において漢学を主に受容し、牽引してきたのは、公家・官人、僧侶である。武家にあっては、主にそれを支える活動を行ってきた。これら各階層における漢学の受容は、先駆的研究として足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』（日本古典全集刊行会、1932 年）、歴史学から和島芳男『日本宋学史の研究』（吉川弘文館、1962 年、増補版 1988 年）、文学から玉村竹二『五山文学　大陸文化紹介者としての五山活動』（至文堂、1955 年）、同『五山文学新集』1 巻～6 巻・別巻 1・2（東京大学出版社、1967～1981 年）、芳賀幸四郎『禅林の学問および文学に関する研究』（日本学術振興会、1956 年）、朝倉尚『禅林の文学　中国文学受容の様相』（清文堂出版、1985 年）、同『禅林の文学　詩会とその周辺』（清文堂出版、2004 年）堀川貴司『五山文学研究　資料と論考』（笠間書院、2011 年）、同『続　五山文学研究　資料と論考』（笠間書院、2015 年）、書誌学から住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究　韻類篇』（汲古書院、2012 年）、中国哲学・思想から四書註釈書研究会『清原宣賢漢籍抄翻印叢書』第一巻　大学聴塵（汲古書院、2011 年）を始めてとして多くの研究蓄積がある。足利は明経博士・文章博士・禅僧などの受容者を列伝的に記し、和島は宋学の受容者として清原氏・禅僧を指摘した。文学からは五山文学と禅僧の活動、書誌学からは五山版漢籍の版本、中国哲学・思想からは清原氏の抄物を翻印し、出典などを解明した。以上の主な先行研究を列挙したが、伝存資料の制約を考慮しても、先行研究には大きな偏重がある。すなわち、公家・官人層では博士家の清原氏、僧侶では禅僧、武家では主に清原氏や禅僧の庇護者についての調査・研究は進展が見られるものの、これら以外の受容層に関する研究について、代表的なものを挙げると、山崎誠『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、1993 年）、佐藤道生『平安後期日本漢文学』（笠間書院、2003 年）が見られるが多いとは言い難い。このような研究状況から、清原氏の家学と五山文学が日本中世漢学の代表であるかのように見なされてきた嫌いがある。それは、多くの先行研究の力点が清原氏家学の明経道と五山文学の実態を解明することに置かれてきたことに起因する。従って、各階層内の包括的俯瞰は未だなされておらず、日本中世漢学の全体像は未だ明らかではない。

申請者は、若手研究（Ｂ）「日本中世漢籍受容の歴史的研究」（2012～2015 年度）において、歴史学と漢籍を中心とする書誌学・文献学とを連結・融合させた「漢籍受容史」を構築し、日本中世の漢籍受容・漢学を日本の学術文化として日本の歴史の中に位置付けを行う必要があると考え、日本中世漢籍受容の変遷の考察を行ってきている。この研究計画を進めていく中で、以上のように先行研究には偏重があることを再認識するに至った。

先行研究は、本研究計画の最終目的である、日本中世漢学史の展開の各階層相互の有機的連関性を実証的に研究するまでには至っていない。以上のような研究状況の中で、本研究計画を推進していくことにより、清原氏の家学と五山文学に力点を置いた従来の研究に一石を投じ、日本中世における漢学が各階層で、どのように展開し、どのように受容されていたか、その有機的連関性が実証的に解明される。そして、日本中世における漢学が包括的に把握され、より立体的・複眼的な、「日本中世漢学史」が構築される。

２．研究の目的

日本中世漢学の研究は、従来、清原氏に代表される博士家の学問や禅僧の文学活動である五山文学の解明が中心であった。しかし、日本中世における漢学の受容層は清原氏と禅僧、及びその周辺のみと言うわけではなく､先行研究は日本中世漢学の実態に迫った研究とは言い難い。このような研究状況に鑑み、本研究計画では、日本中世漢学として位置付けた研究が乏しい、博士家以外の公家・官人層と顕密僧のそれぞれにおける漢学実態を解明し、日本中世における漢学が各階層で、如何に展開し、如何に受容されていたか、その有機的連関性を実証的に解明することを最終目的とする。本研究を推進していくことにより、日本中世漢学史の包括的に把握する基盤が構築され、新たな「日本中世漢学史」を開拓し、構築することができる。

３．研究の方法

本研究計画では、清原氏の学問や禅僧の文学活動である五山文学以外の中世漢学の実態の調査・考察を行い、順次、研究成果を発信していく。

（１）清原氏以外の公家・官人層の漢学の実態

阿部隆一「本邦現存漢籍古写本類所在略目録」(『阿部隆一遺稿集　第一巻　宋元版篇』汲古書院、1993 年)を見てもわかるが、我が国に現存する中世以前の漢籍写本は、文章博士家の菅原氏系統のものが若干見られるものの、多くは明経博士家の清原氏系統のものである。このように、現存する中世以前の漢籍写本の多くが明経博士家の清原氏系統のもの、あるいは派生のものであることから、清原氏系統本の調査・研究が進み、これに基づいた清原氏の家学の研究が積極的になされてきた。

上記のことから、本研究計画では、清原氏以外の公家・官人層のうち、紀伝道を家職とする文章博士家の藤原氏北家日野流、藤原氏南家に着目する。我が国に現存する中世以前の藤原氏北家日野流、藤原氏南家の系統の漢籍写本は少なく、藤原氏北家日野流、藤原氏南家の漢学に関する研究は進んでいない。現存する中世以前の藤原氏北家日野流、藤原氏南家の系統の漢籍

写本は少ないが、日野流、南家は年号勘文の勘申者を輩出した家であるので、改元・年号関連資料には日野流、南家の漢学の実態解明に繋がることが推測される。我が国では公年号を決定する上での年号案は漢籍であり、年号勘文に引用される漢籍は紀伝道の文章博士家の漢学解明に裨益することが考えられ、上述の通り、現存する漢籍写本が少ない日野流、南家については貴重な研究資料となることが推測される。とりわけ、本研究計画では、国立歴史民俗博物館所蔵の廣橋家旧蔵記録文書典籍類・田中穣氏旧蔵典籍古文書・高松宮家伝来禁裏本京都大学総合博物館所蔵勧修寺家文書、国立公文書館所蔵資料、宮内庁書陵部所蔵資料を調査対象とする。

（２）顕密僧の漢学の実態

研究開始当初の背景や研究目的で記した通り、先行研究では禅僧の文学活動である五山文学に関する研究について進展を見せてきた。しかし、禅僧以外の僧侶、すなわち顕密僧もまた当然漢籍を受容し、漢学を講究してきた。本研究計画では、若手研究（B）「日本中世漢籍受容の歴史的研究」（2012～2015 年度）の成果を承けて、天野山金剛寺所蔵漢籍や金沢文庫保管資料などを基づき、調査・考察を行う。天野山金剛寺は、院政期・鎌倉時代初期には後白河院や八条院から帰依を受け、鎌倉時代末期・南北朝時代には後醍醐天皇と密接な関係を築き、大覚寺統（南朝）の後村上天皇の行在所となった真言宗御室派の古刹で、貴重な漢籍類が伝来している。金沢文庫は改めて記すまでもないが、清原教隆に漢学を学んだ金沢実時が邸宅内に造った文庫で、実時・顕時・貞顕・貞将の金沢北条氏四代が蒐集・保管した。現在の神奈川県立金沢文庫には、金沢北条氏の金沢文庫伝来の資料と、実時開基で金沢北条氏の菩提寺称名寺伝来の資料が所蔵・保管されている。とりわけ、称名寺伝来の聖教には華厳・真言・律関連のものがあり、漢学の影響を受けたものも少なくない。以上のことから、本研究計画では、天野山金剛寺所蔵資料と神奈川県立金沢文庫所蔵聖教のうち、漢学の影響が顕著なものを対象に漢学の実態を調査・考察を行う。

（３）鈔本『論語義疏』の書誌学的調査・研究

鈔本『論語義疏』の書誌学的調査・研究は、国内外で鈔本『論語義疏』最多の所蔵数を誇る台湾故宮博物院図書文献館所蔵の楊守敬観海堂旧蔵本を対象とする。台湾故宮博物院所蔵の楊守敬観海堂旧蔵本の書誌解題に阿部隆一『中国訪書志』（汲古書院、1983 年増訂版）があり、まず必読の研究である。しかし、『中国訪書志』は楊守敬観海堂旧蔵本の解明に重点が置かれ、鈔本『論語義疏』に特化したものではない。そのため、本研究計画では、台湾故宮博物院図書文献館所蔵の楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』の書誌事項を示し、全貌を明らかにする。

以上の各項目に関する研究成果は、国内外の研究集会・学術会議で発表し、議論や批評を活かし、更なる研究の深化に繋げ、活字化していく。

４．研究成果

上記の研究の方法に従って推進した主な研究成果の概要は以下の通りである。

（A）清原氏以外の公家・官人層の漢学の実態

国立歴史民俗博物館所蔵の廣橋家旧蔵記録文書典籍類の改元・年号関連資料の検討を通じ、藤原氏南家成季裔の藤原経範は『修文殿御覧』を披覧し得る環境にあったと推定されること、南北朝時代初期（北朝）の暦応度の頃、藤原氏南家成季裔の藤原房範は『修文殿御覧』を披覧し得る環境にあったと推定されること、暦応度頃までは藤原氏南家成季裔は『修文殿御覧』を披覧し得る環境にあったと推定され、『修文殿御覧』を所蔵し相伝されていたと推測されること、鎌倉時代後期の応長度の頃、唐橋家系の壬生坊城家の菅原在登は『修文殿御覧』を披覧し得る環境にあったと推定されること、藤原北家日野流の日野資宣は『修文殿御覧』を披覧し得る環境にあったものの、これを所蔵していなかったかと窺測され、資宣は同時代に『修文殿御覧』を所蔵していた家・人物から『修文殿御覧』を借覧した可能性があること、鎌倉時代中期においては少なくとも我が国に『修文殿御覧』、『藝文類聚』、『太平御覧』が伝存し、公家・官人層に利用されていたと言え、氏族・家・系流によって、各々利用されていた類書が異なっていたと考えられること、などを明らかにした。当該期の類書利用は複線的であったことがわかる。なお、改元・年号関連資料は、藤原氏北家日野流、藤原氏南家のみならず、紀伝道の文章博士家の漢学実態解明のための研究資料の制約の解消に期待される資料であることが確認できた。成果は、水上雅晴編・高田宗平編集協力『年号と東アジア―改元の思想と文化―』（八木書店、2019 年）所収の「年号勘文から見た日本中世における類書利用―『修文殿御覧』をめぐって―」、「国立歴史民俗博物館所蔵「〔経光卿改元定記 寛元 宝治 建長〕」―影印、附・略解題―」に結実し、「国立歴史民俗博物館所蔵田中穣氏旧蔵典籍古文書『元秘抄』略解題」（『人文学論集』第 37 集、2019 年、大阪府立大学人文学会）に示されている。

（B）日本中世における漢籍の書名の読み方

国立歴史民俗博物館所蔵の廣橋家旧蔵記録文書典籍類の「〔経光卿改元定記　寛元 宝治 建長〕」の寛元度に、年号勘文の読申において、年号字並びに引文の名（出典）は呉音（対馬音）にて読むことが規定されていたことが記されていた。また、『編御記』嘉禎度に、寛元度以前の嘉禎度において、菅原氏では既に年号勘文の読申法について、出典である漢籍の名称は呉音で読み、本文は漢音で読むことが記されていた。この二点は、改元と言う重要な朝儀の中で、書名としての漢籍は呉音で読まれていた証左である。我が国における書名としての漢籍の読み方

（呼称）を多様な方面から検討する上で極めて重要な事実であることを指摘した。今後、このような点も含めた書名としての漢籍の読み方を検討すべきであることを提起できたことは意義深い。成果は、水上雅晴編・高田宗平編集協力『年号と東アジア―改元の思想と文化―』（八木書店、2019 年）所収の「年号勘文から見た日本中世における類書利用―『修文殿御覧』をめぐって―」、「国立歴史民俗博物館所蔵「〔経光卿改元定記 寛元 宝治 建長〕」―影印、附・略解題―」に示されている。

（C）古代の漢籍受容

上記の（A）で明らかにした清原氏以外の公家・官人層の漢学の実態、とりわけ『修文殿御覧』の利用実態について繋がる点も私見を提示できた。『修文殿御覧』は、『日本国見在書目録』、『弘決外典鈔』外典目・巻第二、『通憲入道蔵書目録』に著録され、『和名類聚抄』、『弘決外典鈔』、『政事要略』、『御堂関白記』、図書寮本『類聚名義抄』、『三教勘註抄』、『秘蔵宝鑰鈔』、『往生要集外典鈔』、『明文抄』に引用され、『貞信公記抄』、『御堂関白記』、『台記』、年号勘文などに受容された明証があり、古代を通じ公家社会に広汎に浸透し、受容されていたことなどを指摘した。また、『日本書紀』神代巻冒頭部における類書利用は、『華林遍略』説と『修文殿御覧』説の両説が併存するが、私見は『修文殿御覧』説に左袒するとの指摘もした。成果は、遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編『日本書紀の誕生―編纂と受容の歴史―』（八木書店、2018 年）所収の「日本書紀神代巻における類書利用」に示されている。

（D）顕密僧の漢学の実態

天野山金剛寺所蔵漢籍類や金沢文庫保管称名寺所蔵聖教の調査・分析をしたが、活字化するには至らなかった。ただし、ある程度、活字化する準備ができており、順次、公表していく。

（E）台湾故宮博物院所蔵の楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』

台湾故宮博物院所蔵の楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』の書誌解題は、阿部隆一『中国訪書志』（汲古書院、1983 年増訂版）所収の書誌解題が最も詳細なものであったが、『中国訪書志』では指摘されていない、書写年代を推定する手がかりとなる書入などを明らかにし、書写時期をより絞り込むなど、更に詳細な書誌解題を提出することができた。これにより、下記の①～⑦の台湾故宮博物院所蔵の楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』の書誌学的な全容は明らかになったと考えられる。

①論語義疏　山田椿庭・鈴木真年遞蔵（闕序。〔室町時代末期近世初期〕写。五冊）
②論語義疏　寺田望南旧蔵（〔室町時代後期〕写（享禄三年〈1530〉以前写）。十冊）
③論語義疏　和学講談所・向山黄邨遞蔵（〔室町時代後期〕写。五冊）
④論語義疏　新井氏旧蔵（〔明治時代初期〕影写。四冊）
⑤論語義疏　有馬氏旧蔵（存巻一・四・七・八。巻一〔室町時代後期〕写、巻四・七・八〔江戸時代中期〕写。三冊）
⑥論語義疏（零本（存巻四・述而第七）〔室町時代末期近世初期〕写。一冊）
⑦論語義疏　盈進斎旧蔵（〔江戸時代後期〕写。五冊。邢昺正義の竄入なし）

以上の七本の書誌解題は、「台湾故宮博物院図書文献館所蔵楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』書誌解題稿（一）」（『人文学論集』第 38 集、2020 年、大阪府立大学人文学会）及び「台湾故宮博物院図書文献館所蔵楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』書誌解題稿（二）」（『紀要（哲学）』通巻第 282 号・第 62 号、2020 年、中央大学文学部）に提出した。

（F）国内外の研究集会・学術会議への参加と学術交流等

（a）国外の研究集会・学術会議等における学術交流・情報交換

《十三經注疏》研究―“從本土到海外”國際學術研討會（2016 年 12 月、上海師範大学）にて発表するとともに「大會總合討論」にて、日本の古代漢学と中世漢学の相異点・特徴、日本伝存漢籍古鈔本の特徴などについて議題を提起し討議した。経学、敦煌学・吐魯番学、中国古典文献学を専門とする中国人研究者が出席した同研討会において、上記の議題を提起し、討議したことは意義深い。席上、上海師範大学哲学与法政学院教授 石立善氏、浙江大学古籍研究所教授 許建平氏、北京大学中国語言文学系講師 程蘇東氏 等と情報交換と交流し、指教を受け、新知見を得た。

古寫本經典的整理與研究國際學術研討會（2017 年 12 月、上海師範大学）にて発表するとともに「總合討論」にて、日本伝存漢籍古鈔本、日本古典籍所引漢籍の特徴・意義について提起し討議できたことは大きな成果である。席上、上海師範大学哲学与法政学院教授 石立善氏、浙江大学古籍研究所教授 許建平氏、南京師範大学文学院副教授 蘇芃氏 等と情報交換し学術交流した。

“中國的經學與日本的經學”國際學術研討會（2018 年 12 月、中央大学駿河台記念館）にて発表し、席上、清華大学人文学院資深教授 彭林氏、蘇州大学文学部講座教授 陳鴻森氏、上海交通大学人文学院特聘教授 虞万里氏、南京大学文学院院長・教授 徐興無氏、上海師範大学哲学与法政学院教授 石立善氏、北京大学中国語言文学系副教授 程蘇東氏 等と情報交換と交流し、示教を受け、新知見を得、その他参加者とも情報交換し学術交流した。

なお、2020 年 3 月に、南京大学文学院院長・教授 徐興無氏、南京大学文学院教授 童嶺氏の招聘を受け、本研究計画の成果として、南京大学文学院、同中国文学与東亜文明協同創新中心において、《年号勘文中所見日本中世的類書利用：以中国北斉〈修文殿御覧〉為中心》の学術講座を行い、滞在中に南京大学域外漢籍研究所において古鈔本『論語義疏』についての共同研究を実施するなどの予定であったが、新型コロナウィルスの感染が拡大したため、遺憾ながらやむなく延期した。

（b）国内の研究集会・学術会議等における学術交流・情報交換

「日中の思想と文化」総合学術会議（2018 年 10 月、北海道大学）にて発表し、席上、中央大学文学部教授 水上雅晴氏、愛知学院大学文学部教授 福島金治氏、北海道教育大学教育学部釧路校准教授（当時） 石井行雄氏、北海道大学大学院文学研究科教授 近藤浩之氏、上海師範大学哲学与法政学院教授 石立善氏に示教を受け、その他参加者と情報交換し学術交流した。

「緯書と漢代経書学」国際シンポジウム（2019 年 12 月、京都大学人文科学研究所）に参加し、席上、京都大学人文科学研究所教授（現、名誉教授）武田時昌氏、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授（現、名誉教授。立命館大学衣笠総合研究機構教授）大形徹氏、広島大学大学院文学研究科教授 末永高康氏、南京大学文学院院長・教授 徐興無氏、南京大学文学院教授 童嶺氏、揚州大学文学院教授 朱岩氏、香港大学教授 馮錦栄氏、円光デジタル大学校教授 鄭宰相氏に示教を受け、その他参加者とも情報交換し学術交流した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 高田宗平	４．巻 38
２．論文標題 台湾故宮博物院図書文献館所蔵楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』書誌解題稿（一）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文学論集（大阪府立大学人文学会）	６．最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高田宗平	４．巻 282-62
２．論文標題 台湾故宮博物院図書文献館所蔵楊守敬観海堂旧蔵鈔本『論語義疏』書誌解題稿（二）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 紀要（哲学）（中央大学文学部）	６．最初と最後の頁 117-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高田宗平	４．巻 37
２．論文標題 国立歴史民俗博物館所蔵田中穣氏旧蔵典籍古文書『元秘抄』略解題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文学論集（大阪府立大学人文学会）	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高田宗平	４．巻 208
２．論文標題 年号勘文に引用された佚書―「経光卿改元定記」所引『修文殿御覧』を中心に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴博	６．最初と最後の頁 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高田宗平（黄昱 訳）	4．巻 なし
2．論文標題 《弘決外典鈔》所引《孝經述議》與京都大學附属圖書館所藏《孝經述議》卷四淺析	5．発行年 2018年
3．雑誌名 “中國的經學與日本的經學”國際學術研討會予稿集	6．最初と最後の頁 71-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高田宗平（梁辰雪・伊藤裕水 訳）	4．巻 15
2．論文標題 淺論日本古籍中所引《論語義疏》―以《令集解》和《政事要略》爲中心	5．発行年 2017年
3．雑誌名 域外漢籍研究集刊	6．最初と最後の頁 271-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高田宗平（石立善 訳）	4．巻 なし
2．論文標題 論日本中世年號勘文所引《藝文類聚》	5．発行年 2017年
3．雑誌名 古寫本經典的整理與研究國際學術研討會論文集	6．最初と最後の頁 30-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高田宗平（伊藤裕水 訳）	4．巻 -
2．論文標題 日本古代對《論語義疏》的受容管窺―以《令集解》所引《論語義疏》二條爲例―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 《十三經注疏》研究―“從本土到海外”國際學術研討會會議論文集	6．最初と最後の頁 24-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石井行雄・近藤浩之・高田宗平	４．巻 201
２．論文標題 田中本『周易』（重文）のもう一つの顔―白点調査中間報告―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 歴博	６．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　6件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 国立歴史民俗博物館所蔵田中穣氏旧蔵典籍古文書『元秘抄』簡介
３．学会等名 「日中の思想と文化」総合学術会議（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 《弘決外典鈔》所引《孝經述議》與京都大學附属圖書館所藏《孝經述議》卷四淺析
３．学会等名 中國的經學與日本的經學 ” 國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 水上雅晴・高田宗平・近藤浩之・石井行雄
２．発表標題 年号勘文の訓法―廣橋家旧蔵記録文書典籍類の中から―
３．学会等名 訓点語学会（第１１６回研究発表会），京都大学文学部，京都市
４．発表年 2017年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 研究報告３　年号と正統性セクション司会
３．学会等名 歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」，国立歴史民俗博物館，千葉県佐倉市（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 論日本中世年號勘文所引《藝文類聚》
３．学会等名 古寫本經典的整理與研究國際學術研討會，上海師範大学，中国上海市（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 石立善氏「論皇侃《論語義疏》之古本」評議人（コメンテーター）
３．学会等名 古寫本經典的整理與研究國際學術研討會，上海師範大学，中国上海市（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 総合討論パネリスト（引言人）
３．学会等名 古寫本經典的整理與研究國際學術研討會，上海師範大学，中国上海市（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 日本古代對《論語義疏》的受容管窺―以《令集解》所引《論語義疏》二條爲例―
３．学会等名 《十三經注疏》研究―“從本土到海外”國際學術研討會（主催：上海師範大學中國古典學研究中心、共催：北京大學禮學研究中心・《古典學集刊》編輯部（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 高田宗平
２．発表標題 大會總合討論パネリスト
３．学会等名 《十三經注疏》研究―“從本土到海外”國際學術研討會（主催：上海師範大學中國古典學研究中心、共催：北京大學禮學研究中心・《古典學集刊》編輯部）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計5件

１．著者名 水上雅晴編・高田宗平編集協力，高田宗平を含め29の共著	４．発行年 2019年
２．出版社 八木書店古書出版部	５．総ページ数 792頁＋カラー口絵32頁
３．書名 年号と東アジア―改元の思想と文化―	

１．著者名 遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編，高田宗平を含め21名の共著	４．発行年 2018年
２．出版社 八木書店古書出版部	５．総ページ数 544（本文536＋カラー口絵8）（担当239-272）
３．書名 日本書紀の誕生―編纂と受容の歴史―	

１．著者名 水上雅晴・石立善主編，高田宗平を含め10名の共編著	４．発行年 2018年
２．出版社 上海社会科学院出版社	５．総ページ数 5185
３．書名 日本漢學珍稀文獻集成　年號之部	

１．著者名 宮内庁書陵部蔵漢籍研究会編著（代表 住吉朋彦），高田宗平を含め24名の共著	４．発行年 2018年
２．出版社 汲古書院	５．総ページ数 477（担当106-107,216-217）
３．書名 図書寮漢籍叢考	

１．著者名 福島金治編，高田宗平を含め20名の共著	４．発行年 2016年
２．出版社 竹林舎	５．総ページ数 556（担当205-227頁）
３．書名 学芸と文芸〈生活と文化の歴史学9〉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考